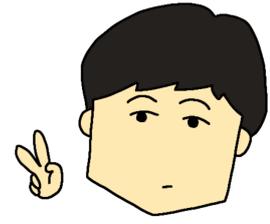


桜の東 レポート



奥山樹生です。2021年11月21日（日）SPAC『桜の園』を鑑賞しに、静岡芸術劇場に初上陸しました。

まずは、東静岡の駅に降り立ち、あたりの景色を楽しみながら劇場に向かいます。

東静岡の駅舎というのは本当にでかいんですが、本当にでかいです。空港さながらの形をしています。そんなところに来るとちょっぴり小旅行気分、これが楽しいですね。まず駅に降りただけで1ワクワクです。都心にはない空気もさらに気分を上げてくれます。それと、「遠くに来た」空気感があたり一面に広がっています。そこまで遠くはないんですけど。そこまで遠くなかったのに、早く訪れなかったことが悔やまれます。

と、グダグダ考えていると、目の前にまたでかい建物が。でかいものしかないのか静岡県。

と、そこが静岡芸術劇場が組み込まれている(?) グランシップ、という建物です！

見た目は方舟みたいな形です。というかそのままか。それがまためっちゃくちゃにでかい。全く普遍的でないその見た目は真ん中がパカッと開いて変形してもおかしくないですね、やたらカッコいい形をしています。

とはいえ、そこまで時間があるわけでもないの、そこまで建物をまじまじと見ることはできません。

劇場に急ぎます！

劇場の入り口からそろそろとはいり、検温を済ませ、入場入場…。

入った時には静かで開けた印象です、迎えてくれた方々のテンションもほど良い感じです。

受付ぐいぐい進めなくなっちゃいます。

余談ですが、先日制作の仕事をやってる方が「迎える人のテンションで大事だよな」という話をしていたので、事実そうだなあと思いました。

劇場そのものの入り口は1階ですが、上演会場は2階に入り口があります。

というわけで、階段を上がります。

現在、この劇場は宮城 聡さんが芸術総監督をなさっています。

宮城さんがどんな劇場を作り、どんな公演を生み出そうとしているのか、一体観客にどんな体験をしてほしいと思っているのだろうか、と思いを馳せていました。

階段を上がるとすぐに目の前に会場の入り口があります。そこを横切っていくと、軽食を取ることができる広い広いスペースがあります。そこで、一旦体制を整えようと思い、会場の入り口に立つスタッフの方に挨拶をして、広いスペースの一角にあるベンチに腰を下ろしました。

そういえば、さっき挨拶してくださったスタッフの方は、宮城さんでした。

ん？



宮城 聡さん…？が、いらっしゃいますね。これは。
宮城 聡さんが、迎えてくださいました。

単純に驚きました。このように芸術監督の方が迎えてく
ださる劇場はあまりないとおもいます。
観客をしっかり迎えてくれる芸術総監督！
安心感といいますか、この劇場に対する親近感がぐいっ
と上がります。入り口の前に立っている、迎えてくれ
る！ということから芸術総監督の劇場に対する情熱を感
じます。
ここまで本気だぞ、静岡芸術劇場。
という熱が伝わってきます。

開場前に、その休憩スペースでは出演する俳優の方が、『桜の園』に関するレクチャーをしてくださいます。
チーフホフに出てくる桜はいわゆる“日本の桜”とは少し違うことや描かれた時代背景など、作品の解像度が上
がっていく、とてもとても興味深いレクチャーでした。

やがて、開場時間になり…

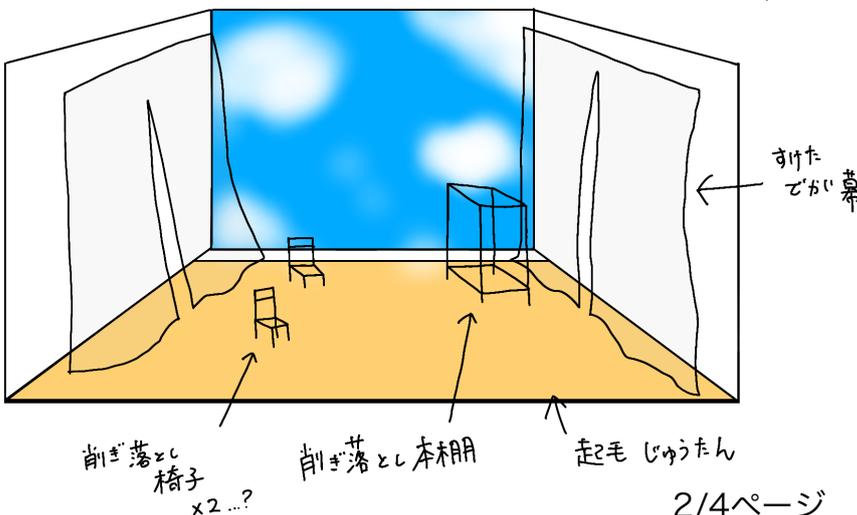
というこの時間もワクワクしますね。扉の向こうにはどんな舞台が広がって、どんな席で見るのか。
一体、どんな世界が広がっているのか。というわけで、えいっ

とはいってみると、野外劇場に来た時のことを思い出しました。
劇場という密閉された空間にも関わらず、どこか開放感があります。劇場の見た目というよりは体がそんな感覚
に陥っていました。不思議な体験ですが、これも別世界に足を踏み込んだ感じがして楽しいです。まだ芝居も始
まってないのに。と、お、お、
舞台上には『桜の園』のセットがあります。しかし、私がどこで見たこともない『桜の園』の舞台です。

うろおぼえ

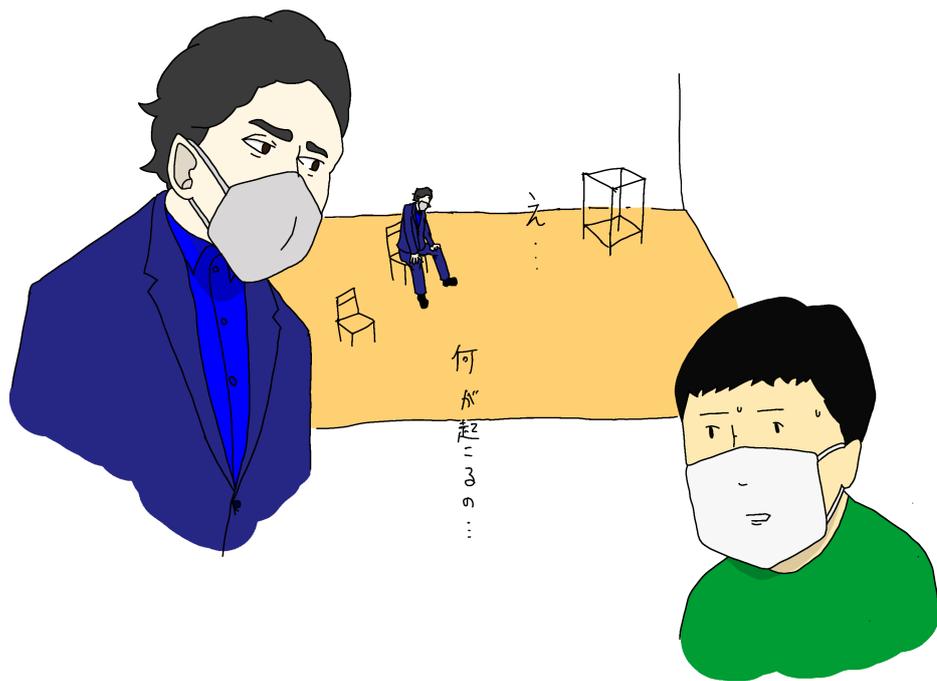
舞台図!!!

音空の映像、の下にはうごける
スペースの溝



舞台奥には大きなスクリーン（もはや壁）青
空の映像が永遠に映し出されています。
舞台上には椅子だとわかる程度に削ぎ落とさ
れた椅子のようなものが2つほど。
のちに本棚だとわかる削ぎ落とされた家具。
両サイドに何かの風になびく透けた大きな
カーテンのような幕があります。
これだけで、作品として成立するほどの存在
感が劇場内に充満していました。
海外作家のインスタレーション作品を見た時
の記憶が呼び起こされました。なぜなのか
は、ちょっとまだ考え中です。多分、何か理由
があるはずです。

開演時間が近づくと、暗がりの舞台上にそろそろ1人の俳優（と最初は確信を持てなかった）が歩いてきて、そっと椅子に座りました。そして、なにやら頭を抱えたりし始めました…。



めちゃくちゃこの状態でした。

一体、何をするの？何の人なの？え、始まってないよね。

（開演時間を見る）

始まってないな。を、繰り返していました。

始まっていませんでした。

しかし、舞台上では、何かが始まっていました。

個人的には、この時間も好きです。現実が歪んでフィクションになっていく、溶け込むというより溶け合っていく感じ…。

開演、舞台下手からドゥニャーシャが歩いてきます。SPAC『桜の園』が始まりました。はじめに佇んでいたのはロパーヒンでした。

第1びっくりポイントは、

SPAC『桜の園』は俳優全員が全編マスク着用での上演でした。独自のガイドラインを徹底している、静岡芸術劇場だからこそかもしれませんが、個人的には驚きました。

第2びっくりポイントは、

過去に見てきたどの劇団の『桜の園』とも全く違っていたというところです。

SPAC『桜の園』で特に「生々しくない」ことが印象的で、抒情的に演出できるシーンも、あえてグッと抑えているように見えました。

鑑賞中、休憩スペースで聞いた「チェーホフはこのうねりに翻弄される時代と人々を描きたかった」という言葉も思い出しました（記憶の限り…！）。

シーンをより抒情的に演出することで、観客を楽しませやすくすることはできると思います。

しかし、そこを抑えることで本来のチェーホフの意図を尊重した演劇になっていたのかもしれませんが。

フランス俳優、日本俳優で言語が違ったまま、コミュニケーションをしているという状態もそのための演出とも見えました。

物語に入り込む、というより舞台上の人間の営みを俯瞰して見れるというのも面白いです。

また、日本の俳優とフランスの俳優で、舞台上での芝居に違いを感じました。特に、演者の身体に違いを感じました。日本、フランスの俳優と比べてこっちがいい、とか悪いとか言う話ではございません。

役柄なのか、普段の生活なのか、演技の上でなのか…。そこまで見抜くことはできませんでしたが、フランスの俳優からは「この場にいる」という身体を強く感じました。日本とフランス、どこに重きを置いているか、普段何を考えているか、文化や考え方の差が、身体にあらわれているようで大変興味深いものでした。どこまでが意識的で、どこから無意識なのかとても気になりました。日仏両方の俳優に「演技とはなんなのか」と聞いてみたらどんな違いがあるのかも気になります。

後日、鈴木陽代さんへのインタビューでお話したことから色々なことを思いました。

元々、SPAC『桜の園』の事業の中心は中高生に鑑賞してもらうことだったそうです。

それを聞いた時「挑戦的」と僕は思ってしまいました。正直に述べますと、SPAC『桜の園』を見て「あー！面白かったー！」と帰っていく人はそうそういないのではないかと思っていたのです。

でもそれで良いのだ。と、鈴木陽代さんにインタビューした時に思いました。いや、そういう舞台こそ見る必要がある、絶対に存在する意味がある。という気持ちが呼び起こされました。

いつの間にか、キャッチコピーが「泣ける」「笑える」「楽しめる」という感じの「わかりやすい」映画や演劇がドカンと増え。気がついたら、そればかりになっているのも現実です。「おもしろい」「つまらない」の一言で忘れられていく作品も多くあります。（もちろん、それ故にいいものもいっぱいあります！）

でもそれは、非常に消費社会的な感じがします。本当にそれで良いのか？と思わざるを得ません。「なぜこれを作ったのか」「このもやもやはなんなのか」「おもしろい！とは一言で言えないけど忘れられない」といった「わかりづらい」作品は、多くの人にとって考えるきっかけになったり、宝物のように胸にしまい続けられるものになると思います。

言い方を極端に悪く、「わかりづらい」と言ってしまいましたが、それは「わからないから、かんがえたい。もっと感じたい。」と言うことだと思えます。

僕は全く脳みそを使わなくてもいい作品も、大衆的なものも、わかりやすい作品もなんでも好きです。しかし、社会が効率ばかりを求められるようになり、芸術作品にまで効率を求められている気がしてなりません。

SPAC『桜の園』は「わからないから、かんがえたい。もっと感じたい。」作品です。

『桜の園』は新時代の到来を告げる作品ですが、まさにSPAC『桜の園』のスピリッツは新時代に必要不可欠だと思っています。

次こそは、おいしいものも食べて帰りたいです。

奥山樹生